

松平直政ノート

1601～1666 結城秀康^{ゆうきひでやす}3男
徳川家康の孫。家光は従兄弟
母は秀康の側室駒（後、月照院）
幼名 河内麻呂、後に国麻呂



経歴

- 慶長14年(1609)9歳の時霊泉寺河南和尚について読書・習字を学ぶ。
- 慶長17年 馬術を習う。
- 慶長18年 初めて甲冑^{かっちゆう}をつける。名を出羽介直政^{でわのすけ}と改める。
- 慶長19年 14歳で大坂冬の陣に初陣。12月4日真っ先に馬をすすめ大坂方の武将真田幸村の出丸に肉薄し力戦奮闘し一躍勇名をはせる。この時、勇猛果敢な戦いぶりに感嘆した敵将真田幸村から軍扇^{ぐんせん}を贈られたという。
- 元和元年(1615)大坂夏の陣では越前松平家の第3隊として、自ら太刀打ちして騎馬武者2騎さらに敵首30余級をあげたので家康より戦功を賞せられ手ずから打飼袋^{うちがいぶくろ}（筒状の底のない長い袋——狩の時犬に投げ与える餌を入れた袋・金銭などを入れて腰に巻いた袋）を賜った。
- 元和2年 兄忠直より越前大野郡木本1万石を分与された。
- 元和5年 従五位下出羽守に任ぜられる。上総国柿崎にて1万石を与えられる。
- 元和9年 家光將軍宣下の際、家光に従って上洛し従四位下にすすむ。
- 寛永元年(1624)越前大野郡大野5万石を領する。
- 寛永10年 松本7万石領主となる。
- 寛永15年 出雲松江18万6000石をを領し、隠岐1万4000石を預かる。
- 寛永16年 国務要領6ヶ条を家老以下諸役人に示した。これは松平家の藩祖としての施政の基本方針を示した物であった。・藩の軍役を定め職制を整備。
- 寛永18年 林羅山の推挙により黒沢石斎を招き藩儒とした。
- 正保2年(1646)町奉行に対し農を国の本とし工商の各々その職掌^{おのおのしよくしやう}を失わないよう諭す。
- 万治元年(1658)隠岐島海士郡刈田山後鳥羽上皇山稜を修復、社殿新築
- 寛文2年(1662)幕府は出雲大社社殿の造営のため銀50万両を献じ直政がこれを監督した。社殿は7年をかけ2代綱隆の時竣工。
- 寛文6年(1666)江戸にて没。66歳 墓は松江市月照寺にあり。



松江城5重6階

どかいこうしゅうき

土芥寇讎記に書かれた松平直政

「土芥寇讎記」は幕府隠密の報告書といわれる物であるが、そこには直政について「吝嗇にして（家臣に）禄をたまわることなく」とある。すなわち締め屋（けち）であったということである。これは松江藩の財政が逼迫していたことを示している。

孫の綱近も吝嗇であったとされ、吉透・宣維をへて6代宗衍のときにはピークに達し

宗衍が一両を求めたところ江戸藩邸に蓄えがなく、近習が江戸中を駆けめぐったが「出羽様（松江藩主）御破滅」と借金に応ずる者がなかつたという。子、治郷（不昧侯）は財政再建に乗り出し、治水土木・灌漑施設を整備し

新田開発を行い、また木綿・染物・酒造・蠟燭等の地場産業を振興し産物を藩の御手船（藩の海運船）で運び利益を上げた。

その結果50万両といわれた借金は治郷治世の後半には9万両の蓄財を成すに至った。この余裕から治郷は茶道具の蒐集に情熱を傾け不昧流という千利休の侘び茶をベースにし、大名茶と町人茶各流派の神髓を統合した流派を打ち立てた。



不昧像

家老朝日丹波と直政

直政の幼少時代の保育をしたのが朝日丹波といい親子のような関係にあったといえます。朝日丹波は父秀康の臣でした。朝日丹波は剛直・寡欲、常に直言して憚りからなかった。直政もよくこれを聞き善政を施したという。松本に入った直政に対して家老となった朝日丹波が治世の心得を説いた話が「露原集葉」収録の「塩尻夜話」にのっています。

秋より冬に至り、羽州公（直政）鷹狩りに出かけるとき、丹波殿申さるは「必ず下々に、かたく申し付けてください。就中、百姓の畑の蕪・大根を抜くなど、強く御申し付けあるべし。下々（身分の低い家来のこと・・・鷹狩りのために獲物を追い出すため勢子が畑をあらすこと等を言っている。）は心むさき（いやしい）もので、百姓の畑の蕪・大根などをも、やたらと抜き食うものです。このことを小さなことだと思っはいけません。畑はあれで百姓の傷みは、かなりなものです。そなた（直政）がどこへ行くにも目付を付けます。下々（家来）の不法は皆そなた（直政）の咎である。ものごとを疎略にして黄門殿（直政の父秀康）の御名を汚してはいけません。」ときっぱりと申し上げたということです。以来下々まで百姓に対し家臣が非義なることは少しもなかったとのことである。

